

グループにおける
「特殊作動グループ」の役割
と効果に関する実験的研究

井 上 操

Misao Inoue

要 約

本研究は、Wilfred Bion の集団理論に基づく実験的研究である。研究の目的は、その理論における「特殊作動グループ」という概念に関する臨床的な仮説を実験的に検証することである。

この概念に基づいて以下の主な仮説をたて、実験を行った。第一の基本的な仮説は、特殊作動グループのいるグループの方が、基底的理想機能が低くなるであろうということである。第二の仮説は、特殊作動グループのいるグループの方が、作動グループ機能が高まるであろうという仮説である。第三の仮説は、逆に SWG のいないグループは、作動グループ機能が低くなるであろうという仮説である。

以上の仮説をもとに、12グループのサンプリングを集め、実験を行った。そして、本研究の基本的な仮説である、①特殊作動グループのいるグループの方が基底的理想の水準が低くなるであろう、②特殊作動グループのいるグループの方が作動グループになるであろう、③特殊作動グループがいないグループは作動グループにならないであろうという仮説を統計的方法を用いて検証していった。

Bion の基本的概念

本研究は、Wilfred Bion の集団理論に基づいている。従って、本研究の基本的な仮説を述べる前に、簡単に Bion の基本的な概念について述べてみよう。

Bion (1961) によれば、グループには二つの機能があるという。それは、「作動グループ」(work group) として機能するか、「基底的理想グループ」(basic assumption group) として機能するかである。

Bion (1961) によれば、「作動グループ」として機能する場合、本質、大きさ、構成、構造、目的に関わらず、あらゆるグループには、メンバー達がそのために集まった基本的な作業 (basic task) があるという。その作業が遂行されるためには、メンバー達がそれぞれの能力に応じた協力、或いは「協同」(cooperation) が不可欠になる。しかし、グループ活動へ参加できるためには、幾年もの習練、経験が必要である (Hafsi, 2000)。さらに、作業に従事するグループに不可欠なもう一つの特徴は、合理的且つ、科学的方法を用いることによって現実に接触しているということである。従って、作業の現実的な側面としての「時間」と「発達」は、グループ活動において重要な意味を持つのである (Hafsi, 2000)。このようなグループ機能を「作動グループ」と呼ぶ。ここでの「グループ」という言葉は「ただ特殊な精神活動を包括するものであって、もっぱらそれに携わる人を意味するものではない」(Bion, 1961, p.144)。

しかし、Bion (1961) によれば、作動グループは常に「基底的理想グループ」と共存し、そしてそれによって阻止されたり、回避されたり、時には支持されたりする場合がある。

「基底的理想グループ」は、グループの成員に共有される目標達成のための手段或いは幻想である (Hafsi, 2000)。Bion はこの情動状態を「依存基底的理想」、「つがい基底的理想」、「闘争／逃避基底的理想」という3つに区別している。

• **依存基底の想定 (basic assumption of dependence)**

このグループの特徴は、絶対的にある人に依存し、グループの必要とするものや欲望をその人（リーダー）によって全部満足させられるべきであるという確信を抱くことである。そのため、メンバーはグループの要求を満たしてくれるであろうリーダーを追い求める。従ってグループは、リーダーだけが全知全能であり、グループ自身は未熟で助けを必要とする無力な存在であり、色々な試みをするのを怖がり、自分一人では意志決定をする能力も無く何も出来無い「かの様に」行動する。この想定を受けたリーダーは、最終的にメンバーの依存全てに応えられずに自滅する。

• **つがい基底の想定 (basic assumption of pairing)**

Bion が用いた pairing (つがい) という用語は誤解を招きやすいが、つがい基底の想定グループにとって重要なのは「つがい」そのものではなく、このつがいによってもたらされる幻想である。このグループの存続は、これから新しく生まれるもの、又は未だ生まれていないリーダー（救世主）に対する希望的な期待を抱き続けることにある。期待される救世主には、不安と恐怖からグループを救うという期待がかけられている。救世主の創造は、つがいとしての（異性、或いは同姓同士の）二人のメンバーに託され、グループはこのつがいに期待をかける。グループにとっては救世主待望自体が目的であって、この目的は決して満たされてはならないのである。つまり、「希望を残存させることによってのみ、希望は存続する」（Bion, 1973; p.146）ように、この希望が満たされるということは、もはやそこに希望がないということを意味するからである。

• **闘争／逃避基底の想定 (basic assumption of fight/flight)**

「闘争」と「逃避」は正反対に異なる種類の反応である、と一般的には理解されているが、Bion (1961) はそれらを分離せず、同じ刺激によっ

て引き起こされた二つの異なった行動として定義している。このグループは、攻撃すべき或いは避けるべき敵がいるという信念を持つ。換言すれば、グループのリーダーが妄想的に仕立て上げられた結果、リーダーはグループ外部又は内部に悪い対象が存在し、そのためにグループは自己防衛したり、又はそれらから逃げなければならないという観念を支持しなければならない。このようなグループの要求に応えることの出来ないリーダーは無視されるのである。

・特殊作動グループ (specialized work group)

集団が作動グループ活動の特徴を示すことが出来る様になるためには、基底的想定を無力化する、すなわち集団における作動グループ機能を邪魔させないようにすることが不可欠になるということを Bion は主張している。

しかし、Figure 1 に示すように作動グループになることは、とても辛いことであるため、作動グループになることから逃げようとする。そうになると、基底的想定が支配的になってしまう。けれども作動グループが支配的になることもある。この場合、作動グループになるための基底的想定を担当するサブグループがいるのである。それによって、グループ内の基底的想定をある程度満たすことができ、作動グループとして活動できるのである。このようなサブグループを「特殊作動グループ」という。

「特殊作動グループ」の役割は、最低限の基底的想定活動を維持しながら、基底的想定グループが主要な集団に於ける作動グループ機能を覆ったり、妨害したりしないように基底的想定活動を引き受けることである (Hafsi, 1999)。

このような Bion の理論に基づいて、以下の仮説を立てた。

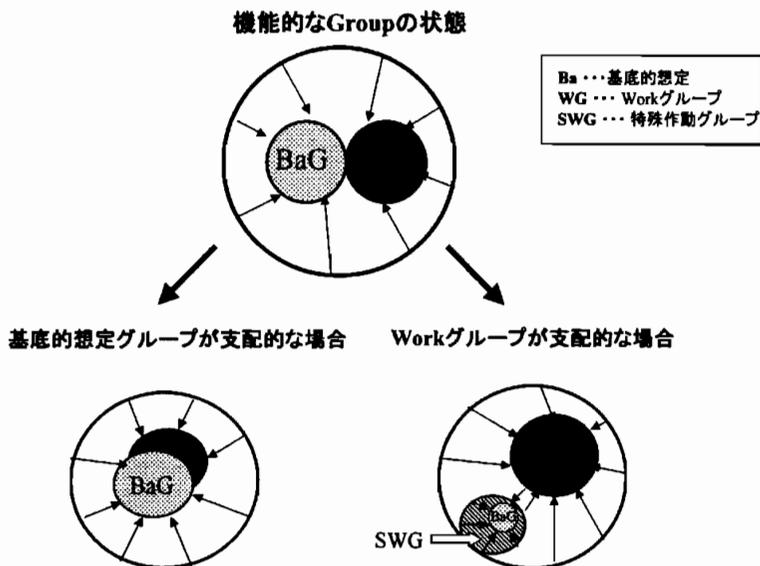


Figure 1 図表による WG と BaG と SWG の関係

本研究の仮説

以下に本研究の仮説を述べることにする。

第一の仮説は、特殊作動グループのいるグループの方が、基底的想定機能が低くなるであろうということである。そして第二の仮説は、特殊作動グループの機能を果たすサブグループ（本研究の場合はサクラ）のあるグループの方が、作動グループ機能が高くなるであろうである。第三の仮説は、特殊作動グループの機能を果たすサブグループのいないグループの方が、作動グループ機能が低くなるであろうということである。

以上の仮説を検証するために、以下の方法を用いた。

方法

前述した仮説を実証的に検証するために、以下の方法を用いた。

(1) 被験者

奈良大学の心理学の講義を受講している学部学生（ $n = 150$ ）に対して実験に参加できるか、できないかについてのアンケートを行い、そこから参加できる学生をランダムに抽出した48名（男=32、女=16）を被験者とした。

この被験者を1グループ5人の計12グループで構成し、その内の6グループは1グループにつきサクラ2人で構成された。サクラには、特殊作動グループの役割（1人は闘争／逃避、もう1人は依存）が与えられた。又、グループは同姓ばかりで構成し、顔見知りではないことを原則とした。

実験は、平成12年6月19日から28日の期間で実施された。

(2) 実験室のデザイン

本実験は、奈良大学社会学部研究棟内にて実施された。実験室の様子は、録画用ビデオカメラとビデオカメラの音を強化するための集音機、マジックミラーによって隣室の実験管理室の実験者に分かるようになっている。

実験室内には、被験者が行う作業の目安を記したホワイトボード、壁側には質問紙と時計を置いた机、中央に作業を行う机と人数分の椅子5脚、そして各椅子の後ろにはA～Eまでの紙が貼られていた。又、机の上には作業を行う際に必要な鉛筆、消しゴム、マジックが置かれていた。

実験者に対する指示は、事前に録音したテープを実験管理室から放送した。これは、事前に録音されたテープを使用することで、実験者と被験者の接触を少なくする事、そして実験者効果が生じにくくする事を目的としている。

(3) 実験の手続き

以下は、実験の流れを示すものである。

a) 実験入室前の指示

事前の連絡で知らされた被験者5名又は被験者3名とサクラ2名を社会学部研究棟3階エレベーター前に集合させた。出席確認後、被験者はA～Eの名札を渡された。この時、Aの名札を渡された人をリーダーとした。又、サクラを入れたグループに於いては、依存誘意性を担当するサクラにD、闘争／逃避誘意性を担当するサクラにEの名札が渡された。

実験者は、被験者を誘導して一番手前の扉から入るように指示した。

b) 実験室入室

被験者達が実験室に入室し着席したことを確認してから、放送があるまで指定された椅子に着席して待つように伝え、実験者は実験室から退室した。

c) 自己紹介

課題の内容は、被験者が1つのグループとして作業するように設定されていたので、まず自己紹介を導入した。これはグループで共同作業をするためにはお互いのことを知っていた方が良いと考えたからである。この時、Aさんがリーダーとなって自己紹介を進めて下さいと指示した。時間は2分間与えられた。

d) 課題の説明

本実験の課題は、奈良大学の案内図を作成することであった。そして、作動グループとしての意識を持たせるために時間制限を設け、前半20分以下書き、後半20分でマジックを使って色付けをすることを伝えた。又、前半と後半の間に10分間の休憩を挟み、その際隣の部屋へ移動させ、その間に専門家が中間評価を行う事を伝え、休憩後被験者が元の部屋に戻ってきた時に「中間評価が置いてあるが、実験が終わるまでは見ないで下さい。」

と告げた。又、放送した内容と同様の内容が簡単に実験室内のホワイトボードに記述されていた。

e) 課題の実行

実験群の方が作動グループになるかどうかを測るために、サクラにはそれぞれの誘意性を表す発言マニュアルを前もって渡し、それを完璧に発言してもらう役割を与えた。

時間は前半・後半を合わせて40分間で、課題終了10分前、5分前に被験者に放送で残り時間を伝えた。これは、グループが決められた時間内に課題を終えなければならないという意識を更に高めるためである。

f) 質問紙

休憩中と後半の課題終了後、5段階尺度の58又は59の質問紙に記入させた。その内、8又は9項目がworkの側面、残り50項目が基底的理想の側面を測るものである。

g) ディブリーフィング

後半の課題終了後に行った質問紙が終了と同時に、実験管理室からグループの様子を観察していた実験者1人が実験室に入室し、被験者達に実験についての感謝の意を述べた。それから被験者達に他の学生に実験のことを口外しないように強く要請した。これは、実験内容を知った被験者達が実験を受けることによって今後の実験内容が変わることを避けるためである。

結 果

本実験の仮説を簡潔に述べれば、第一の仮説は、特殊作動グループの機能を果たすサブグループのあるグループの方が、作動グループ機能が高くなるであろうであった。第二の仮説としては、特殊作動グループの機能を

果たすサブグループのいないグループの方が、作動グループ機能が低くなるであろうであった。この仮説を検証するために、二つの平均を比較する t -検定を行った。その結果は、Table 1 と Table 2 に示されている通りである。

Table 1 休憩中に行った質問紙のWork項目における
実験群と統制群との比較 (t -検定の結果)

work 項目	実験群	統制群
Q 1	2.17 (1.02)	3.07** (1.28)
Q 2	3.3 (.87)	3.07 (1.2)
Q 3	2.9 (1.18)	2.9 (1.28)
Q 4	3.37 (.93)	3.0 (1.29)
Q 5	2.93 (.91)	2.4* (1.1)
Q 6	3.33 (1.03)	2.77 (1.63)
Q 7	3.01 (1.11)	2.2** (.91)
Q 8	2.4 (1.13)	2.17 (1.14)

Note: 数値は、平均と基準偏差を表す

* $p < .01$

** $p < .001$

まず、Table 1 (休憩中にとった質問紙の結果) に示されているように、「時間は気になった」という Q 1 における実験群と統制群を比較した結果、有意な差があった。つまり、実験群の方が時間を重視しているといえる ($t(58) = 3.01$; $p < .001$)。

そして、「作業は順調だった」という Q 6 における実験群と統制群を比較した結果においても有意な差があった ($t(58) = -2.08$; $p < .01$)。ま

た、「作業は円滑に進んだ」というQ 7においても有意な差が得られた ($t(57) = -3.26$; $p < .001$)。

Table. 2 実験後に行った質問紙のWork項目における
実験群と統制群との比較 (t -検定の結果)

work項目	実験群	統制群
Q 1	2.87 (1.2)	3.23 (1.48)
Q 2	3.0 (1.0)	2.0** (.81)
Q 3	2.83 (1.51)	2.77 (1.63)
Q 4	3.1 (1.18)	3.13 (1.41)
Q 5	3.07 (1.11)	2.0** (.83)
Q 6	2.3 (.95)	1.69* (.66)
Q 7	1.63 (.61)	1.8 (1.19)
Q 8	2.23 (.94)	1.47** (.63)
Q 9	1.53 (.51)	1.73 (1.01)

Note: 数値は、平均と基準偏差を表す

* $p < .001$

** $p < .0001$

次に Table 2 (実験後にとった質問紙の結果) に示されているように、「完成したものに納得できた」というQ 2において、有意であった ($t(58) = -4.26$; $p < .0001$)。そして、「満足いくものが出来た」というQ 5においても有意だった ($t(58) = -4.21$; $p < .0001$)。また、「作業は順調だった」というQ 6においても有意だった ($t(57) = -2.85$; $p < .001$)。Q 8の「作業は円滑に進んだ」という質問においても有意な結果が得られた

($t(58) = -3.73$; $p < .0001$)。

次に、Q 1～Q 8 又は Q 9 の項目を 4 つのカテゴリー（時間、評価、結果、発達）に分け、実験群と統制群を比較するため、 t -検定を行った。

Table. 3 主観的に見た評価における実験群と統制群との比較

Work の側面	実験群	統制群
休憩中		
評価	2.9 (1.18)	2.93 (1.28)
時間	2.28 (.74)	2.62 (.78)
結果	3.33 (.86)	3.03 (1.2)
発達	3.0 (.82)	2.33*(1.01)
実験後		
評価	3.13 (.72)	2.97 (.75)
時間	2.2 (.89)	3.02*(.87)
結果	3.12 (.78)	2.73 (.98)
発達	2.87 (.96)	2.47 (1.41)

Note: 数値は、平均と標準偏差を表す
* $p < .001$

まず Table 3 に示されるように、休憩中に行った質問紙では、発達において有意であった ($t(58) = -2.8$; $p < .001$)。実験後に行った質問紙では、時間において有意であった ($t(58) = 3.61$; $p < .001$)。

そして、本研究の仮説を更に検証するために、Q 9～Q 17 又は Q 18 の項目を闘争/逃避、依存、つがいのカテゴリーに分け、実験群と統制群を比較するために t -検定を行った。

その結果、Table 4 に示されているように、休憩中に行った質問紙では、闘争/逃避 ($t(58) = 6.54$; $p < .0001$)、依存 ($t(58) = 3.86$; $p < .0001$)、つがい ($t(58) = 3.26$; $p < .0001$) の全てにおいて有意であった。また、実験後に行った質問紙においても、闘争/逃避 ($t(58) = 4.55$; $p < .0001$)、

Table. 4 基底的想定側の側面から見た実験群と統制群との比較

基底的想定側の側面	実験群	統制群
休憩中		
Fight/Flight	3.25 (.76)	4.37* (.54)
Dependency	2.46 (.82)	3.34* (.95)
Pairing	2.78 (.74)	3.52* (.99)
実験後		
Fight/Flight	3.33 (1.02)	4.5* (.74)
Dependency	2.67 (.81)	3.64* (.85)
Pairing	2.78 (.74)	3.52* (.99)

Note: 数値は、平均と標準偏差を表す
* $p < .0001$

依存 ($t(58) = 5.07$; $p < .0001$)、つがい ($t(58) = 3.23$; $p < .002$) で有意であった。

考 察

前述したように、本研究の第一仮説は、特殊作動グループの機能を果たすサブグループ（本研究の場合はサクラ）のあるグループの方が、基底的想定機能が低くなるであろうである。そして第二の仮説は、特殊作動グループのいるグループの方が、作動グループ機能が高くなるであろうであり、第三の仮説は、特殊作動グループの機能を果たすサブグループのいないグループの方が、作動グループ機能が低くなるであろうということであった。結果から見ると、仮説1は検証されたが、仮説2と仮説3は検証されなかった。

まず Table 1 と Table 2 から解るように、有意な差が得られてもその殆どが、仮説と逆の結果になった。これは、一つには質問紙の項目に問題があったと思われる。何故なら質問紙の項目の数が少なかったので、Work

の側面を測るには十分ではなかったと考えられるからである。また、質問紙の項目が主観的な項目しかなかったので、客観的な項目も必要ではなかったかということも反省すべき所であると思われる。

もう一つには、質問紙における統計的方法だけを行ったので、被験者が描いた案内図を評価することも必要ではなかったかと思われる。つまり、絵に対する評価項目を作成し、3～4人の評価者に被験者の描いた絵を評価させることで、Workの側面を測ることが出来たのではないかと考えられる。

また、課題にも問題があったのではないかと考えられる。何故なら殆どの被験者が一回生だったので、大学内のことを未だ把握できておらず、課題がやりづらかったのではないかとと思われるからである。

最後の反省点として、サクラの役割の問題である。よりはっきりした結果を出すために、Fight担当のサクラにはよりFight的に、Dependency担当のサクラにはより依存的な態度をとらせたために、他の被験者にとってはやりづらくなってしまった可能性が考えられる。そのために、統制群の方に結果が出てしまったのではないかとと思われる。

以上のような問題点を解決し、これからの研究に役立てたいと思う。

<付記>

本稿を執筆するに当たり、貴重なご意見、御指導を賜りました、奈良大学社会学部 Mohamed HAFSI 助教授に心から感謝申し上げます。

参考文献

- Bion, W. R., 1961. *Experiences in groups and other papers*. New York: Basic Books.: (池田数好/訳 (1973)「集団精神療法の基礎」岩崎学術出版社)
- Bion, W. R., 1961. *Experiences in groups*.: (対馬忠/訳著 (1973)
「グループ・アプローチ」サイマル出版会)
- 高橋哲郎/訳 (1982)「ビオン入門」岩崎学術出版社

Hafsi, M., 1999. Beyond Group Inhibition and Irrationality: Bion's Contribution to the Understanding of the Group: 奈良大学大学院研究年報 第4号 67-108.

Hafsi, M., 2000. RGST 日本版の作成とその妥当性～Bion による「誘意性」の測定試み～ : 日本心理臨床学会第19回大会研究発表